

「第 27 回 奨励賞・功労賞」記念特別号

一般社団法人

日本女性科学者の会 NEWS

The Society of Japanese Women Scientists

No.131 Special Issue, 2022.9



I. 会長のご挨拶

「いのち」を全機性・動的に捉え生かす身心一体科学の視座

～転換期の日本女性科学者の会を担う女性科学者の育成を SJWS から～

一般社団法人 日本女性科学者の会 10 代会長 跡見 順子

東北支部理事の発案と多くの会員からの要望により 1995年に会費と寄付金を基金として創設され、その後、科学教育者守田純子氏のご遺志による寄贈、さらに多数の会員の方々の熱意と寄付が追加されつつ維持・運営されているSJWSの奨励賞・功労賞はすでに第27回を数える歴史と伝統ある賞で、昨年までに54名の女性研究者を表彰しています。コロナ禍3年目の贈呈式も、オンラインでの開催となりました。本年は受賞者の皆さんに実際に会いに出かけ、研究者を志したきっかけや、活躍促進の課題をお聞きし、どのような困難があろうともあきらめず失望しない、平塚らいてふの「無限生成」の言葉を想起しました。

いま、時代の転換期です。感染・戦争・環境・不活動に由来するストレスに、人間の<いのち>が危機に脅かされている情勢とも言えます。分析的・要素還元的科学だけで人間の<いのち>は守れるのでしょうか。生命は生命体という場の中での統合機能であるという全機性の考えを橋田邦彦(1882~1945)は示しました。創発的な生命の単位は細胞です。心筋細胞を一個ずつにして尚、拍動し続けるのを顕微鏡で観察すると、自分がリアルに「細胞」によって生かされていると、<いのち>の本質に触れて感動します。シャーレの上で心筋細胞が拍動し続けることができるのは、支点を中心にバランスよく接着しているからで、そうでなければ剥がれてしまいます。身体は37兆個の細胞と細胞が分泌する細胞外マトリックスできています。その身体が重力に抗して立位姿勢を保つことができるのは、支点である丹田のおかげです。意識にのほりにくいので、

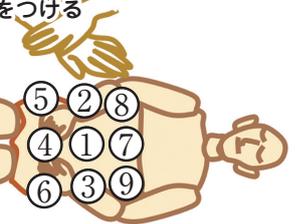
毎朝行う身体調律体操で自分の身体にリマインドさせることが重要です(跡見2022)。生きている自分を科学の対象として行う教育・研究が身心一体科学です。女性は身体から生まれながらにして多くの情報をもたらすため、身心一体科学は女性が活躍できる研究領域でもあります。<いのち>を科学で論理化して、人間の尊厳を取り戻すには女性の力が必要です。3月のセミナーでお話いただいた「日本を解き放つ」の著者の小林康夫さんも期待されました。

SJWSは色々動き始めました。理事だけでなく会員の方にもお声がけしてSJWSの顔であるHPがリニューアルされます。本年は理事選挙があります。基本的に8年ルールを守るため交代する方が大勢いますので、ぜひとも理事に立候補して、組織運営を勉強してください。上位職階の担い手になるための貴重な経験になります。会長企画で応募して下さった会員二人からの提案で2つの勉強会が立ち上がりました。中高生を対象に「会友」制度が生まれま。コロナはまだ続いているので、12月の学術大会(九州で開催)はオンライン開催になりますが、皆さまの積極的なご参加をお待ち申し上げております。



膝関節症の痛みにつながらない身体の調律で
バランス制御力をつける

立位時の身体の悪癖を逃れ、広い背中に接触点を作る「臥位」で行う身心調律運動です。番号順に自分の手で触覚情報を入れ、対応した部位を中心に腹筋の収縮-弛緩を行います。丹田呼吸もマスターできます。



目次

I. 会長のご挨拶	1
II. 第27回日本女性科学者の会 奨励賞・功労賞 受賞者のプロフィール	2
III. 奨励賞受賞者の講演要旨	4
IV. 受賞者の挨拶	7
V. 第27回奨励賞・功労賞贈呈式	9
VI. 第27回日本女性科学者の会 賞選考経緯	10
VII. 2021年度会務報告、2022年度事業計画	10

理事監事名簿

理事：小川 美香子、梅津 理恵、本間 美和子、山田 恵子、跡見 順子、板倉 明子、小杉 尚子、後藤 典子、近藤 科江、清水 美穂、武井 史恵、玉井 幸恵、野呂 知加子、長谷川 美貴、森 義仁、山本 眞由美、永澤 秀子、沼野 利佳、浜田 恵美子、岡村 恵美子、稲田 明理、川内 敬子、島田 緑、城崎 由紀、福原 正代、小川 由起子、廣瀬 理沙

監事：大倉 多美子、宮本 霧子

顧問：大野 茂男、丸岡 賢

第27回日本女性科学者の会
奨励賞受賞



飯間 麻美氏
(IIMA MAMI)

京都大学医学部附属
病院 先端医療研究開
発機構・放射線診断科
・助教
博士(医学)京都大学

研究課題：「拡散MRIを用いた新たながん診断法の開発」

賞贈呈理由：受賞者は、非侵襲的に水分子のランダムな拡散運動を画像化できる拡散MRIを用いて、組織の微小灌流を評価可能な定量値(IVIM)を始めとするさまざまな画像の定量値を新たに抽出して活用することにより、身体に負担の少ない安全で新たながんの画像診断法を開発している。画像診断は多様化するがんの治療戦略において非常に重要である。がんのMRI診断において使用される造影剤には副作用などの問題があり、非侵襲的なMRI撮影や診断法の開発が切望されている。拡散MRIから、従来の白黒の定性情報に留まらない定量値を算出し、乳がんのサブタイプを始めとする様々な因子と関連付けることにより、臨床において汎用性の高いイメージングバイオマーカーを探索している。さらには、再発、転移や予後、治療効果情報と関連付け、臨床医が時間制約のある現場でも使いやすい診断法を開発することで、より信頼性の高いがんの診断、治療を行えるようになることを目指している。

略 歴：2010年 京都大学 大学院医学研究科 放射線医学講座 博士課程
2011年 フランス ニューロスピン(超高磁場MRI研究所)留学
2013年 日本学術振興会 特別研究員(DC2)
2015年 京都大学 白眉センター 特定助教
2018年～2020年 京都大学医学部附属病院 放射線診断科 特定病院助教、
先端医療研究開発機構 放射線診断科 助教

連絡先：〒606-8507 京都市左京区聖護院川原町54
TEL：075-751-4749 E-mail：mamiima@kuhp.kyoto-u.ac.jp

第27回日本女性科学者の会
奨励賞受賞



星野 歩子氏
(HOSHINO AYUKO)

東京工業大学・准教授
博士(生命科学)
東京大学

研究課題：「エクソソーム含有タンパク質によるがん転移機構と診断バイオマーカーの解析」

賞贈呈理由：がんの転移に臓器特異性があることは130年以上前から知られていたが、がん細胞がどの臓器へ転移するのかを規定する因子が何であるかは不明であった。受賞者は、がん細胞が産生するエクソソーム(細胞外小胞の一種)を解析し、エクソソーム表面の特定のタンパク質を介して、遠隔臓器の特異的な細胞にエクソソームが取り込まれることを見いだした。その結果、転移を誘導するニッチが未来転移先で形成され、がん細胞が臓器選択的に転移する機序を明らかにした。さらに、血中に循環するエクソソームのプロテオーム解析を用いて、がんの有無やがん種の同定ができることを見いだしている。この結果では、エクソソームを用いたがんの同定には、がん細胞が産生するエクソソームを捉えることなく、がん種特異的な全身性的変化がエクソソームを介して解析でき、診断マーカーに用いることができる可能性があることを報告した。これらの成果から、がん転移を阻止する治療の開発や、がんの新規診断マーカーへの応用に発展する可能性が考えられ、今後も該当分野を国際的にリードし続けることが期待される。

略 歴：2010年 コーネル大学医学部小児科 客員研究員～博士研究員
2011年 東京大学大学院新領域創成科学研究科 博士(生命科学)学位取得
2015年～コーネル大学医学部小児科 助教、准教授
2019年 東京大学IRCN 講師、東京大学卓越研究員、さきがけ研究員(兼任)
2020年 NY大学クワンティック工科大学 バイオインフォマティクス高度専門士の学位取得
2020年 東京工業大学生命理工学院准教授

連絡先：〒226-8501 横浜市緑区長津田町4259 東京工業大学 生命理工学院 星野研究室
TEL：045-924-5139 E-mail：ayukohoshino@bio.titech.ac.jp

第27回日本女性科学者の会
奨励賞受賞



櫻井 香里氏
(SAKURAI KAORI)

東京農工大学大学院
工学研究院・准教授
Ph.D.プリンストン大学

研究課題：「天然生物活性分子の標的タンパク質探索技術の開発と作用機構解明研究」

賞贈呈理由：受賞対象に関する要約：受賞者は、天然生理活性分子の作用機構を解析するためのターゲットタンパク質探索法を開発し、新規な活性発現機構を見出した。植物や微生物が生み出す天然物には、医薬品候補として興味深い新規な化合物が多数存在するが、活性発現の起点となる標的タンパク質や標的機構の同定はほとんどなされていない。受賞者は、特に強力で選択的な抗癌活性を示すOSW-1に着目した。OSW-1の効率的な化学修飾法を開発し、独自に合成した化学プローブを用いることで、30年来未解明であった、OSW-1のゴルジ体を標的とする新規機構を世界で初めて明らかにした。さらに、ナノサイエンスを融合し、金ナノ粒子界面を利用して標的タンパク質のラベル化反応を制御する全く新しい方法を開発し、直接的な標的の同定を可能とする化学プローブ法を合理化した。この先駆的なアプローチの確立は、これまで未開拓の天然物の生理作用を網羅的に研究するための有効なツールを提供し、新規創薬標的分子や標的機構の開拓につながる。

略 歴：2002年 プリンストン大学大学院 化学科 Ph.D.取得
2003年 ハーバード大学大学院 化学・化学生物学科 博士研究員
2006年 東北大学大学院理学系研究科化学専攻 特任助教
2006年 東京農工大学大学院共生科学技術研究院 テニュアトラック特任准教授
2010年 東京農工大学大学院工学研究院 准教授

連絡先：〒184-8588 東京都小金井市中町2-24-16 東京農工大学大学院工学研
TEL：042-388-7374 E-mail：sakuraik@cc.tuat.ac.jp

第27回日本女性科学者の会
功労賞受賞



今榮 東洋子氏
(IMAE TOYOKO)

名古屋大学名誉教授
国立台湾科技大学
栄誉講座教授

略 歴：1965年 奈良女子大学理学部化学科卒業、大阪大学蛋白質研究所文部技官
1969年 名古屋大学理学部化学科文部技官
1973年 名古屋大学理学博士取得
1973年 ブランダイス大学博士研究員
1975年 名古屋大学理学部化学科助手
1990年 同 助教授
1999年 名古屋大学物質科学国際研究センター助教授
1999年 同 教授
2006年 名古屋大学名誉教授
2006年 慶應義塾大学大学院理工学研究科特別研究教授
2008年 同 先導研究センター特別研究教授
2009年 国立台湾科技大学教授
2006年 Chulalongkorn 大学(タイ)副指導教員
2010年 総合科学技術会議議員
2011年 第22期日本学術会議連携会員
2013～2014年 マラヤ大学(マレーシア) Academic Icon 客員教授(兼任)
2013～2015年 東京理科大学 Research Platform Center Program 客員教授(兼任)
2015～2016年 山形大学 iFront Doctoral Program 特別任命教授(兼任)
2020年 名古屋市立大学客員教授(兼任)

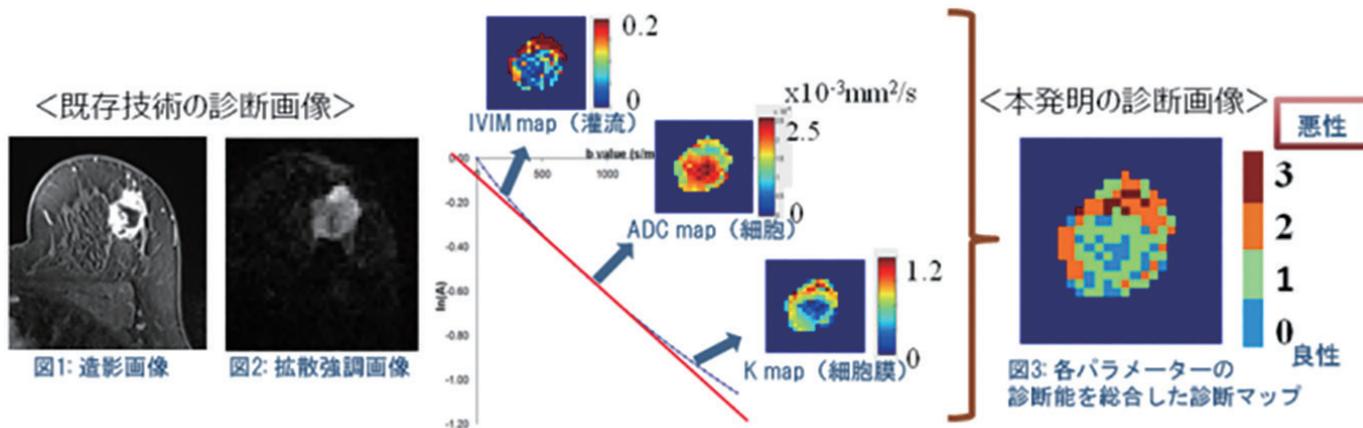
連絡先：〒904-0412 名古屋市千種区園山町2丁目4-17

TEL：052-781-3093 E-mail：imae@mail.ntust.edu.tw

拡散MRIを用いた新たながん診断法の開発

京都大学医学部附属病院 先端医療研究開発機構・放射線診断科 飯間 麻美

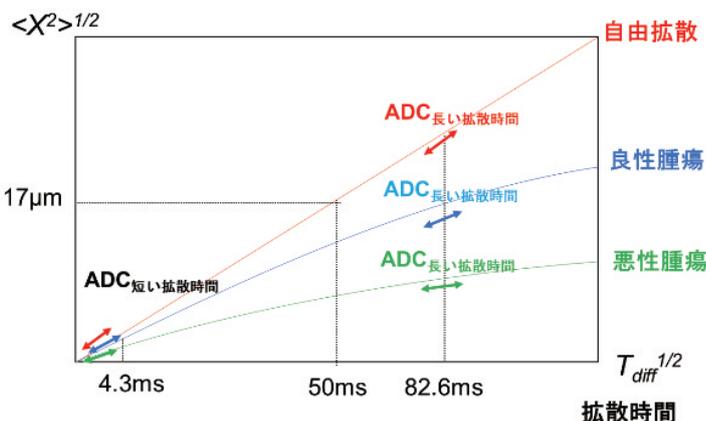
近年におけるがんの治療技術の進歩はめざましく、がんの治療法も多岐にわたる。同時に、精緻な分析に基づいた診療、治療成績の向上、患者さんの負担軽減に繋がる様な、安全かつ正確ながん診断技術の開発も求められている。患者さんの比較的負担の大きい外科的手法や造影剤の投与によらない、水分子の拡散現象を画像化可能である、非侵襲的な拡散MRIを用いた新たな腫瘍診断法を開発を行っている。



拡散MRIは、造影剤を使用しないため副作用のリスクがない、安全な検査法である。組織中の水組織のブラウン運動による分子変位の程度を画像化する技術であり、得られる見かけの拡散係数（ADC：Apparent Diffusion Coefficient）は正常組織に比し腫瘍で減少することから、腫瘍特有の組織構築を反映する新たな定量値として注目されている。ADC値は現在、2点の（拡散強調の度合いを表す）b値より算出可能であり臨床で広く使われているが。また、多くのb値で拡散MRIを撮影し解析することにより灌流を評価できるIVIM(Intra-Voxel Incoherent Motion)や、組織の微小構造を新たに評価可能な非ガウス拡散MRIなどの新たな拡散強調MRI定量値を算出可能である。悪性腫瘍の検出に最も高い感度/特異度を持つ各パラメーター値において診断閾値を設定し、すべてのパラメータの閾値を組み合わせることにより悪性から良性までの定量的診断スコアを確立することで、病変全体又はピクセル単位でカースケールを用いて可視化する手法を考案し、特許化した（上図）。この手法により、造影剤を使用せずに腫瘍グレード評価が可能となるだけでなく、生検部位の誘導につながる様な腫瘍の不均一さを表示したり、治療効果の判定にも使用することができる。

また、一般的に臨床で使用される拡散MRIの分解能はmm単位であるが、様々な拡散時間での拡散MRIを撮影し、拡散方程式を用いることにより μm 単位での見かけの拡散距離も計算可能であり、拡散MRIを顕微鏡の様に活用して評価できるようにもなりつつある（右図）。

腫瘍の良悪性やサブタイプを始めとする様々な情報と拡散MRIから得られる定量値を統合的に関連付け信頼度の高い個別化診断技術を開発することで、がん診断や治療の一助となると考えられる。



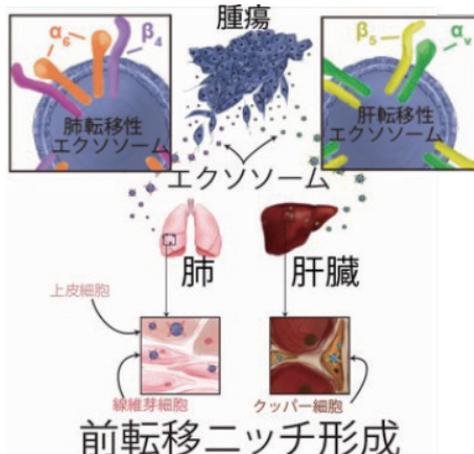
エクソソーム含有タンパク質によるがん転移機構と診断バイオマーカーの解析

東京工業大学 星野 歩子

がん転移には臓器特異性がある。例えば乳がんは肺、肝臓、骨、脳へ転移することが知られているが、膵臓がんは肝臓へ、メラノーマは肺へ、とそれぞれ転移しやすい性質を持つ。がんの臓器特異的転移は今から130年以上前にseed and soil（種と土壌）仮説として発表され、がんの転移はランダムな確率論では説明できず、がん細胞（種）は転移しやすい適切な環境が整った臓器（土壌）でのみ転移巣を形成すると提唱された。以来、がん細胞の持つ転移能だけでなく、転移の成立には転移先を構成する正常細胞の変化も関わること、そして、その転移先細胞から成る微小環境「前転移ニッチ」の役割が重要であることが明らかになってきた。つまり前転移ニッチが形成されている臓器こそががんの転移先となるという考え方である。しかし、がん細胞から遠く離れた転移先において、どうやって「前転移ニッチ」が形成されるのか、ニッチ形成のトリガーとなる細胞でどのような変化がおきているのか、は長年の謎であった。

エクソソームはがん細胞を含む全ての細胞から産生される30-150 nmの大きさの微小胞で、がんやアルツハイマー等様々な疾患でマーカーおよび機能分子として疾病に関わる可能性が検討されている。細胞のゴミ処理機構と考えられて来たが、新たな細胞間コミュニケーションツールとしての重要な機能が着目されている。

がんが臓器特異的に転移する際の、未知のメカニズムを明らかに



我々は肺および肝臓転移性がん細胞が産生するエクソソームが、それぞれの転移先臓器に取り込まれることによって「前転移ニッチ」を形成することを報告した (Hoshino *et al.*, *Nature* 2015(article))。それぞれのがん細胞から産生されるエクソソームを正常個体に注入するだけで、がん細胞の特定の臓器への転移を誘発することが出来る。さらに、そのメカニズムとしてエクソソームの膜上に存在するインテグリンのパターンがエクソソームの臓器特異的な分布を規定し、転移に必要な微小環境の変化を誘発していることを見出した (Hoshino *et al.*, *Nature* 2015 *ibid*) (図)。次に、脳転移性がんについても検討し、がん由来エクソソームに含まれるCEMIPが脳の前転移ニッチ形成に寄与することを報告した (Rodrigues*, Hoshino* (第1共著者) *et al.*, *Nature Cell Biology* 2019)。このように、がん由来エクソソームこそががんの前転移ニッチ形成の鍵を握るという概念を世界初で提唱してきた。

図 エクソソーム上の特定のインテグリンが郵便番号の役割を果たし、エクソソームの臓器特異的な分布を促す。エクソソームは取り込まれた臓器内で前転移ニッチを形成する。

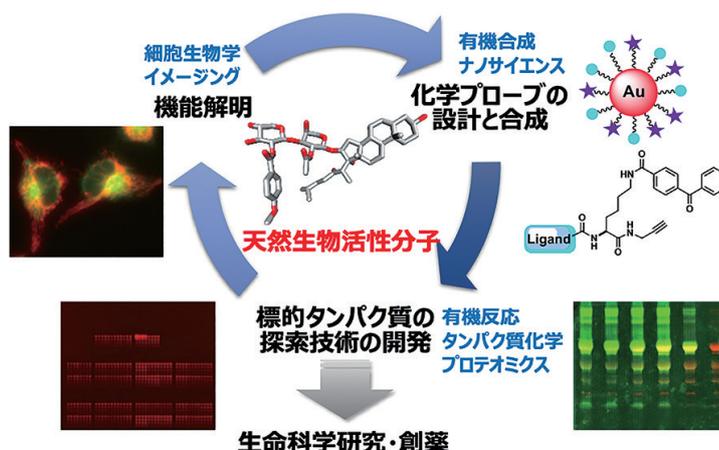
エクソソームプロテオミクス解析によるバイオマーカーの検討へ

エクソソームの分野は急速に発展しており、様々な疾患の定量的指標となることへの期待が高まる中明確なバイオマーカーが確立していない。我々は400以上のヒト由来細胞株、手術組織、血漿、血清、骨髄液、等幅広いサンプルからエクソソームを回収し網羅的にプロテオミクス解析を行った。これにより、如何なる組織由来のエクソソームにも対応できるマーカーを明らかにした。また、血中エクソソームのプロテオミクスデータにより、がんの診断およびがん種の同定も可能であることを教師ありの機械学習によって証明した。これは、ステージIの早期がんでも検出ができ、早期診断や原発不明がんの特定にも期待できることを報告している (Hoshino *et al.*, *Cell* 2020)。

天然生物活性分子の標的タンパク質探索技術の開発と作用機構解明

東京農工大学 大学院工学研究院 櫻井 香里

社会の長寿化やグローバル化が進む現代において、天然生理活性分子(天然物)は、がんや感染症を克服する低分子医薬品および抗体薬物複合体の基盤分子として重要性が増しています。しかし、近年の技術革新によって多くの生体高分子が網羅的に解析されるようになった一方で、天然物の作用の解明は立ち遅れています。これは、活性発現の起点となる標的タンパク質や標的機構の同定が依然として研究のボトルネックとなっているためです。私は2006年から東京農工大学において、新たな研究構想と研究室をゼロから立ち上げ、有機化学の視点に基づいて、このような天然物化学・ケミカルバイオロジーにおける最重要未解決課題の解決に取り組んできました。特に、有機合成化学を基礎として、天然生理活性分子の作用機構を解析するための標的タンパク質探索法を開発し、新規な活性発現機構を見出してきました。



1. 抗がん活性天然物の機能解明

植物や微生物が生み出す天然物には、医薬品候補として興味深い新規な化合物が多数存在します。私たちは、漢方薬や野菜などに多く含まれる主要な天然物群であるサポニンに着目しました。サポニン化合物は、親油性のコレステロールに似た部位と親水性の糖鎖部位から成る面白い構造をもっており、抗がん活性などの共通の特性が示唆されていますが、化学プローブを用いた機能の研究はあまり行われていませんでした。特に強力で選択的な抗がん活性を示すOSW-1に対して効率的な化学修飾法を開発して、作用を解明するための官能基を分子に導入した化学プローブの合成に成功しました。これらプローブを用いることで、30年来未解明であった、OSW-1のゴルジ体を標的とする新規機構を世界で初めて明らかにしました。ゴルジ体は細胞周期に重要なチェックポイントの役割を果たすことから、このオルガネラに特異的な阻害剤は、新規な抗がん剤の開発につながると期待されます。

2. 化学プローブ法による新規標的タンパク質探索技術の開発

化学プローブを用いた天然物の標的の同定法は、薬理作用を担う標的タンパク質のみならず、副作用を発現するオフターゲットタンパク質の網羅的な発見が可能です。このため、生体内における医薬品の作用の全容を解析する方法としての応用が期待されています。これまでの天然物の標的の同定は試行錯誤と経験による部分が多く、合理的な基盤技術の確立が求められています。そこで私たちはナノサイエンスを融合し、金ナノ粒子界面を利用して標的タンパク質のラベル化反応を制御する全く新しい方法を開発し、直接的な標的の同定を可能とする化学プローブ法を合理化しました。このようなアプローチの確立は、これまで未開拓の天然物の生理作用を網羅的に研究するための有効なツールを提供し、新規創薬標的の分子や標的機構の開拓につながることが期待されます。

奨励賞受賞のご挨拶

京都大学医学部附属病院 先端医療研究開発機構・放射線診断科 飯間 麻美

この度は、第27回日本女性科学者の会奨励賞という大変栄誉ある賞を頂きまして、誠にありがとうございました。またこのような賞を頂いたのも、今までご指導下さった先生方、応援して下さいました周囲の皆様や家族、そして患者さんのお蔭であり、この場をお借りして心より感謝の言葉を申し上げます。

私は主に乳房の画像診断を専門とする放射線診断医で、新たながん診断法の開発に取り組んでまいりました。研修医の時に日常診療で湧いてきた拡散MRIに関する疑問点を一つずつ解き明かそうとするうち、気が付けば研究の世界に入っていました。京都大学大学院在籍中に、有難いことに子供、母と共にフランスのニューロスピン高磁場センターに三世代留学する機会に恵まれました。ニューロスピンではマウス腫瘍モデルを用いた高磁場拡散MRIによる前臨床研究を通じ拡散MRI定量値が腫瘍のどのような特徴を捉えているのか検討し、帰学後はその知見を臨床研究においても活用し、拡散MRIによる乳腺腫瘍の良悪性やサブタイプなどの鑑別に役立てるか研究を続けてまいりました。2人の子供を抱えながら研究や臨床、また現在は先端医療研究開発機構で本学の医療開発に関する研究支援もさせて頂いています。各々のタスクの特性は異なるものの、物事の捉え方などノウハウを活かせるところもあり、興味が尽きることはありません。女性に限らず科学者のキャリアパスは多様化してきています。私がこれまでサポート頂いてきたように、これからの方達にとって研究の芽が出やすく、育ちやすい環境となるよう微力ながら貢献していきたいと考えています。

奨励賞受賞にあたって

東京工業大学 星野 歩子

この度は名誉ある日本女性科学者の会奨励賞を賜り、大変光栄に存じます。選考委員の皆様にご心より御礼申し上げます。

大学2年生の時に友人が骨肉腫を患ったことを機に、疾患、特にがんについて、体内でどのような変化が起きているのか学びたいと考える様になり、大学院ではがんセンター東病院病理部の研究室で、がん細胞とそれを取り巻く間質細胞との相互作用について研究しました。教科書や論文に書いてあることだけではわからない、現場でがん患者を診ている医師の経験や感覚からくる情報の多さに驚き、疾患を学ぶ上で、臨床医との連携が不可欠であることを実感しました。その後約9年間、米国コーネル大学で臨床医であるDavid Lyden先生の研究室にて、がん転移機構とエクソソームについて研究を進めてきました。多くの臨床医が研究に関わる環境の中で、基礎と臨床の融合的な研究成果を得ることができ、その様な点についても今回評価いただけたのではないかと考えております。

現在、研究室を立ち上げてから2年が経ちました。星野研は基礎研究者、臨床医、そして企業からの研究者、など様々なバックグラウンドの人材で構成されています。考え方、文化、目標が異なるダイバーシティーがあり、そこから生まれる新しいサイエンスを目指して、未来に資するエクソソーム研究の発展に邁進していく所存です。日頃から私の研究生活を支えて下さっている多くの先生方や研究室の皆さんに、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

最後に、研究が大好きな私をいつも見守ってくれている夫、たくさんの我慢をさせているかもしれないけど、健やかに育ってくれている娘に心より感謝します。

奨励賞受賞のご挨拶

東京農工大学 大学院工学研究院 櫻井 香里

この度は、長年にわたり女性科学者をエンカレッジしてきた、歴史ある素晴らしい賞を賜りまして大変光栄です。日本女性科学者の会の関係者の皆様に、お礼を申し上げます。今回の受賞研究は、東京農工大学での私の研究室の現在の学生と卒業生たちと一緒に作り出したもので、彼らの活躍によってはじめて実現できたものです。今後も学生たちと一緒に面白い研究を展開し、社会に発信していきたいと思っております。共同研究者の先生方にも多くを教えていただき、導いていただきました。この場を借りてお礼を申し上げます。また、共同研究者でもある夫と、家族に心より感謝したいと思います。

天然生理活性分子は、古来より創薬資源として重要な役割を果たしてきましたが、その有効利用は膨大な試行錯誤と経験に依存しています。現代社会において医療ニーズが多様化する中で、様々な天然物の標的タンパク質と作用機構の解明は、より副作用が少なく安全性の高い医薬品や生物研究に有用な特異性が高い分子ツールの開発に不可欠です。私たちはこのような問題に対して、有機合成化学を基礎として、ナノサイエンスの方法も取り入れ、標的タンパク質の同定を合理化する新しい技術を創出してきました。一見遠回りに見える、こうした基礎研究が、いまだ多く存在する未解明の天然物の作用機構解明と応用を飛躍的に加速させると信じています。

これからも研究教育活動を通して、女性研究者たちの活躍に貢献できるように新たな挑戦に取り組んでいきたいと思っております。日本女性科学者の会の今後ますますのご発展を祈念いたしまして、受賞の挨拶とさせていただきます。

功労賞受賞挨拶

名古屋大学名誉教授・国立台湾科技大学荣誉講座教授 今榮 東洋子

2022年度日本女性科学者の会功労賞受賞の栄誉を賜りましたことを嬉しく拝受いたし、ご尽力いただきました関係諸氏に深く感謝申し上げます。1999年に日本女性科学者の会奨励賞をいただいた直後に教授に昇格し今回の受賞まで教授職を継続できましたこと、会との深い因縁を感じております。奈良女子大学卒業と同時に大阪大学に奉職した後、名古屋大学に転職し、留学、助手、助教授を経て、定年退職まで勤めさせていただきました。この間、これら昇級を保証されていたわけではなく、結婚、出産、育児を機に退職された先輩を見聞きし、男性中心の職場で3年以上先の私の立場は未確定という状況でした。2006年に、名古屋大学を定年退職し、慶應義塾大学で特別研究教授として横浜に移住しまし際に日本女性科学者の会へ入会し、理事としての仕事も引き受けました。2009年に国立台湾科技大学に転職し、同時に内閣府総合科学技術会議議員、日本学術会議会員、その他国の行政職委員を兼務することになり、日本と台湾を週に一往復する勤務体制が4年続き、そんな状況でも日本女性科学者の会は私にとってオアシスでありましたので、理事を続けたいと願いましたが、物理的に叶わなくなり、理事職7年の短きに終わりました。これまで、皆様から頂いた恩返しの代わりとして、台湾では、台湾及び東南アジアからの女子博士大学院学生を積極的に受け入れて、男子院生とともに、将来それぞれの国を背負って立つ人材になるよう、彼らへの教育に全力を注いでおります。

V. 第27回奨励賞・功労賞贈呈式

一般社団法人日本女性科学者の会 第27回奨励賞・功労賞贈呈式と、同時に、本会推薦第18回日本学術振興会賞授賞式が、2022年5月22日(日)に、内閣府、一般社団法人男女共同参画学協会連絡会、日本分子生物学会の後援にて、公開オンライン開催されました。奨励賞受賞記念講演会では、Web参加者と活発な討論が行われました。

プログラム

- 1 主催者挨拶 日本女性科学者の会会長 跡見順子氏
- 2 来賓挨拶 内閣府男女共同参画局長 林伴子氏
文部科学省科学技術・学術政策局長 千原由幸氏、科学技術政策担当大臣 小林鷹之氏
- 3 奨励賞選考経緯説明ならびに奨励賞贈呈式、功労賞受賞者挨拶
【奨励賞】受賞者：3名
飯間 麻美氏（京都大学医学部附属病院・助教）
星野 歩子氏（東京工業大学生命理工学院・准教授）第18回日本学術振興会賞授賞同時受賞
櫻井 香里氏（東京農工大学大学院工学研究院・准教授）
【功労賞】受賞者：1名
今榮東洋子氏（国立臺灣科技大學應用科技學院應用科技研究所・榮譽講座教授, 名古屋大学・名誉教授）
- 4 奨励賞受賞記念講演会



功労賞受賞者
今榮氏



奨励賞受賞者
飯間氏



奨励賞受賞者
星野氏



奨励賞受賞者
櫻井氏



跡見会長・森先生・後藤先生(SJWS)



清水先生(SJWS)

Ⅳ. 第27回日本女性科学者の会 賞選考経緯

一般社団法人日本女性科学者の会 選考委員 後藤 典子



第27回奨励賞は、2021年6月に本学会のHPに募集要項を掲載するとともに、本会広報誌（SJWS News）、男女共同参画・女性研究者支援関連センターや施設がある80あまりの大学や研究機関へのメール案内、関連する学会のHPへの掲載等を介して、広く周知しました。2021年11月1日～20日までの約3週間を応募期間として募集したところ、全部で15名の応募がありました。内訳としては、化学分野が2名、物理・数学・情報分野が1名、生物・生化学等分野が3名、医学・歯学・薬学分野が7名、その他が2名でした。応募者の中から、特に優れた応募者を12月の理事会にて選出し、化学分野2名、医学・歯学・薬学+生物・生化学等分野3名の計5名について、各専門分野の外部評価委員（各分野3名、全部で6名）に評価を依頼しました。その評価結果を基に、3月の理事会にて奨励賞の趣旨にふさわしい候補者の最終選考を行いました。その結果、化学分野から櫻井香里氏、医学・歯学・薬学+生物・生化学分野から飯間麻美氏、星野歩子氏の3名に奨励賞を贈呈することが決まりました。

第27回功労賞は、2021年6月の理事会にて要項の内容を承認した後、本学会のHPに推薦要項を掲載し、2021年11月1日から20日までの約3週間、功労賞の推薦を募集いたしました。そして、今榮東洋子氏が12月の理事会にて最終的に推薦され、3月の理事会にて承認されました。

Ⅶ. 2021年度会務報告、2022年度事業計画

【2021年度会務ならびに事業報告】

1. SJWS主要会議の開催状況

定時会員総会

2021年5月23日(日)、オンライン会議

出席者数：出席 57名、委任提出124名、合計 181名

【審議事項】

- (1)2020年度会務ならびに事業報告
- (2)2021年度会務ならびに事業計画案
- (3)2020年度収支決算と監査報告
- (4)2021年度予算案
- (5)新理事候補の紹介と新理事の選任

【報告事項】

- (1)代表理事の挨拶と新理事の紹介
 - (2)規則改訂について
 - (3)学術誌投稿規定等の変更について
 - (4)2020年度新理事候補者選挙について
 - (5)2021年度SJWS賞贈呈式について
- ※審議事項は、すべて提案どおり承認された。

【理事会】 ZoomによるWeb会議

第1～5回通常理事会(第43～49回)

第1～2回臨時理事会(第45～46回)

【定時会員総会・理事会決定事項】

- ①理事の選出、代表理事、ブロック長選出
新規ワーキング(WG):選挙管理WG、提言・要望WG
- ②会員専用サイトの適用に伴い、会員規則を変更し、各種届出様式を更新した
- ③各ブロック、年間計画を作成しそれに沿ってブロック活動を実施した
- ④「サイエンスコミュニケーター認定証」を新たに作成。2021年度は5名が活動
- ⑤国への提言活動「総合知」による未来社会の実現に向けた日本女性科学者の会として、7つの提言を示し、国に提出した
- ⑥学術誌について、冊子版発行の時期を12月J-stageに電子版を掲載することが決定された
- ⑦広報・渉外委員会より、60周年記念事業の際のロールモデル集を、HPなどで広く開

示し、現理事や現会員の希望者には、適宜追加可能とする

⑧慶弔規則制定、役員候補者選出規則改定

2. 出版活動

SJWS NEWS：2021年9月および3月

日本女性科学者の会学術誌：2022年(電子版)

3. 奨励賞・功労賞の贈呈

①第26回2021年度奨励賞・功労賞贈呈式ならびに奨励賞受賞記念講演会

日時：2021年9月26日(日) オンライン(お茶の水女子大学)

②第27回2021年度「日本女性科学者の会奨励賞・功労賞」の選考

4. SJWS主催事業

・SJWS第26回2021年度奨励賞・功労賞贈呈

式ならびに奨励賞受賞記念講演会

日時：2021年9月26日(日)参加206名

奨励賞・功労賞贈呈式・講演、内閣府女性のチャレンジ賞表彰

・SJWS2021年度例会シンポジウム

日時：2021年9月26日(日)

共催：国立大学法人お茶の水女子大学

後援：内閣府男女共同参画局 文部科学省

日本学術会議

男女共同参画学協会連絡会

・SJWS2021年度新春学術シンポジウム

日時：2022年1月10日(日) 参加70名

担当：SJWS関西・中四国ブロック

5. SJWS参画事業への参加

◆2021年度子ども科学教室への共催◆

開催日：2021年7月31日(土)、11月13日(土)

◆女子中高校生夏の学校◆

開催日：2021年8月8日(日)、9日(月)

◆JNWESの活動◆

International Network of Women Engineers and Scientist ASIA and Pacific Nation Network (INWES-APNN) Conference and Meeting

開催日：2021年10月7日(木)～9日(土)

◆男女共同参画学協会連絡会◆

開催日：2021年10月9日(土)

第19回男女共同参画学協会連絡会シンポジ

ウム

◆会員との連携強化に向けた会長企画◆

開催日：2021年7月11日(日)

◆国際婦人年連絡会第5回セミナー◆

日時：2022年1月22日(土)

◆クオータ制を推進する会(Qの会)の活動への参画◆

◆かなテラス「理工系キャリア支援講座」講師派遣事業◆

開催日：2021年6月9日(水)

◆日本学術会議公開シンポジウム(SJWS共催)◆

開催日：2021年11月13日(土)

◆国際シンポジウム◆

開催日：2022年1月27日(木)

6. ブロック活動

・令和3年度関東圏ブロック企画

開催日：2022年3月26日(土)

【2022年度事業計画】

1. SJWS主要会議の開催予定

・定時総会：2022年5月22日(日)

・理事会：5回

2. 出版活動

・SJWS NEWS、日本女性科学者の会学術誌の刊行

3. 奨励賞・功労賞の贈呈

・第27回2022年度奨励賞・功労賞贈呈式ならびに奨励賞受賞記念講演会

開催日：2022年5月22日(日)

・第28回2022年度「日本女性科学者の会奨励賞・功労賞」の募集と選考ならびに「日本女性科学者の会功労賞」の選考

SJWS奨励賞/功労賞募集：2022年11月1日(火)～20日(日)

4. SJWS主催事業：

・学術大会2022年10月(予定)

・新春学術シンポジウム2023年1月(予定)

5. SJWS参画事業への参加

・女子中高校生夏の学校2022への参加

・第20回男女共同参画学協会連絡会シンポジウムへの参加

・International Network of Women Engineers

and Scientist ASIA and Pacific Nation
Network (INWES-APNN) Conference and
Meeting

- ・国際婦人年連絡会
- ・第45回分子生物学会フォーラム学生企画

6. 外部団体事業への後援

7. ブロック活動

8. 理事選挙2023年1～2月

※議事録はホームページの会員専用ページに掲載
されています。



事務局からのお知らせ

・『日本女性科学者の会』の新ホームページ

『日本女性科学者の会』のホームページがリニューアルされました。
<https://sjws.or.jp/>

・理事選挙について

2023年1～2月に理事選挙がございますので、電子投票のため、メールアドレスをご登録ください。

第28回(2023年度)『日本女性科学者の会奨励賞』 候補者 募集要項

対象者：広く理系の分野において研究業績をあげ、その将来性を期待できる方で、かつ本会の趣旨に賛同し、その達成のために努力していると認められる本会正会員および学生会員を対象とします。特に年齢、国籍、性別は問いませんが、管理職（教授、部長等）にある方はご遠慮下さい。自薦・他薦は問いません。

※応募と同時に入会申し込みも受け付けます。詳細はSJWS事務関係「入会案内」
<http://www.sjws.info/prize/index.html> の項目をご覧ください。

応募書類：①本会所定の書式(上記ホームページからダウンロードして下さい)

②論文リスト

③関連する主要論文3編のPDF(賞応募課題の研究に関連する5年以内のもの。論文リストの番号に○をつける)

応募方法：Eメールにて提出(①に署名した用紙はPDF化して送付して下さい)。添付ファイルには応募者の氏名を記載し、圧縮せずにそのまま添付いただくか、別の方法(無料ファイル送付サービス、例えば「データ便」「宅ふぁいる便」等)で応募書類をお送りください。

応募期間：2022年11月1日(火)～11月20日(日) 必着

提出先：日本女性科学者の会 賞担当係 E-mail: award@sjws.info
件名を「日本女性科学者の会奨励賞応募」として送信して下さい。

決定時期：2023年3月末頃(メールにて本人宛通知)

編集：沼野 利佳・森 義仁・小杉 尚子・玉井 幸恵・小川 美香子・廣瀬 理沙

発行所：一般社団法人 日本女性科学者の会 ©

事務局：〒184-8588 東京都小金井市中町2-24-16 先端科学実験棟 205

東京農工大学 工学府 材料健康科学寄附講座内

TEL/FAX 042-388-7539 E-mail: office@sjws.info